



●特集1 心と頭で奏でる 美しいスラー&スタッカート

ロマン派作品を中心に

タッチやペダリングで こんなに楽に美しく!

山季布枝 ●ピアニスト

皆さんは、ご自分が演奏する譜面を、
ピアノの譜面台の上だけで見ていませ
んか。たまにはピアノ以外の場所で楽

譜を広げて、じっくりチェックしてみ
ましょう。

調性、拍子、テンポ、強弱、指使い、

ペダル……。改めてご説明する必要も
ありませんが、楽譜にはさまざまな記
号が書き込まれています。それらを詳

しく読まずに、いきなり弾き始めたと
しましう。途中に出てくるイタリア
語の楽語を気にしながら演奏すること



やまき・のぶえ ●高校卒業後、ウィーン国立音楽大学ピアノ科に入学。在学中に一時帰国し日本デビュー。同大卒業後はソロ、デュオ、室内楽、歌曲伴奏の活動を国内外で行う。2001年、スロヴァキアに招かれ「ベートーヴェン・月光ソナタ創作200周年記念演奏会」に出演、「国際フンメル協会・文化遺産保護団体」よりR.パロバー章を授与される。CD録音、ピアノコンクール審査、執筆活動のほか、レクチャーコンサートも数多く開催。社団法人全日本ピアノ指導者協会正会員。



●譜例1 シューマン:《勇敢な騎士》冒頭 「こどものためのアルバム」第8曲

●譜例2 シューマン:《トロイメライ》冒頭 「こどもの情景」第8曲

●譜例3 シューマン:《鬼ごっこ》冒頭 「こどもの情景」第3曲

*譜例1:「ウィーン原典版 こどものためのアルバム」より 譜例2、3:「ウィーン原典版 こどもの情景」(以上、音楽之友社)より
*指番号と○で囲んだペダル記号は筆者による

はできますし、スタッカートやアクセント記号も眼の中に飛び込んでくるでしょう。しかしスラーのつなげ方や切り方、細かいアーティキュレーション、小さな休符などは、意外とうまく反応できずに弾き飛ばす場合が多いようです。

「音を短く」という意味ですが、皆さんはどれくらいの短さで演奏していますか。16分音符や8分音符、4分音符……スタッカート記号がどの長さの音符についていても、同様に「短く」弾いてはいませんか。もしくはただ「切

ところで、スタッカートといえ

ました。さっそく楽譜の上で検討していきましょう。

推進力と立体感を シューマン《勇敢な騎士》

出だしの右手の8分音符にスタッカ

って弾く」という意識で、アクセントがついたような鋭い切り方をしていますか。

スラーに対しては、どのような意識で「なめらかに」演奏していますか。スラーの記号がどこからどこまでを結んでいるか、よく確認していますか。そして、そのスラーはただ切らずに弾けばよいのでしょうか。

またペダルはどのような踏んでいきますか。ペダルを踏むのは楽譜に書いてある記号のところだけです。踏み込みの深さを考えていますか。また踏むことばかりを考え、ペダルを元に戻す意識を持っていますか。

ここまでお読みになって何か思い当たることがあったら、「楽譜を読む」意識のスイッチが入りま

スタートしていますが、6拍目からのスタートですから、鋭い音ではなく軽快に弾きます(譜例1)。拍子感をしっかり感じて、1拍目と4拍目は、ここが強拍、ここが中強拍、という意識を持って、他のスタッカートがついた音よりほんの少しだけ重みをかけて弾くと、立体感のある演奏になります。

2小節目、3小節目のそれぞれ1拍目と2拍目には、その2音をつなげてほしいという意味のアーティキュレーションがついています。この演奏のコツは、4の指から2の指へと、ただつなげる意識ではなく、4の指にかなりの重みをかけて鍵盤を押し下げ、次の2の指はその押し下げた4の指と一緒に鍵盤が戻ってくる反動で、鍵盤に短くふれるような感覚をもってタッチします。大切なのは、2の指の動きをわざわざ独立させて「弾き直さない」という意識です。そしてまさにこの4の指を押し下げるときに、足がペダルに届く生徒さんであれば「チョン」と短く浅いペダルを音と同時に入れ、すぐペダルを上げます。

この要領がつかめたら、2音を結ぶアーティキュレーションはきれいに表現できるはずです。この曲は、題名のイメージからか、鋭いスタッカートで演奏されるのをよく耳にしますが、むしろスタッカートは軽めにして、*sf*がついているアーティキュレーションを強調すると、推進力とメリハリのある

●譜例4 チャイコフスキー:《古いフランスの歌》「こどものアルバム」第16曲

a 冒頭



b 第17小節~



*譜例4:「チャイコフスキー:こどものアルバム」(音楽之友社)より *指番号は筆者による



演奏になります。

2音を結ぶ表現
シューマン《トロイメライ》

シューマン独特の、それぞれの声部が絡み合う美しい作品です(譜例2)。

あまりに有名な曲ゆえ、案外楽譜を正確に読まずに聴き覚えで演奏している人が少なくありませんが、楽譜をよく見直してみると……。

まずレガートでなめらかに歌われるテーマ。アウフタクトの「ド」は、冒頭は4分音符ですが、中間部(第8小

節)は8分音符、続いて前打音(第16小節)、そして最後はまた4分音符(第20小節)で書かれています。それぞれの音価をしっかりと認識して弾き分けなければなりません。

また右手の1小節目の「ミファラ」と2小節目の「ドファ」はスラーでつながっていないことにも注目してください。「ドファ」は前述の2音を結ぶアーティキュレーションと同じ考え方で演奏してみましょう。

ただしこの曲の場合、二つ目の音の切り方は、鋭いスタッカートではなく、かなりやわらかく優しく、かつ丁寧に抜くように短く演奏します。こういうソフトな感じを表現したい場合の2音目の処置は、短すぎる切り方だとアクセントがついてしまうし、かといって鍵盤の上に長く指を置くと逆に重くなった感じがして、アーティキュレーションの表出ができません。たいへん難しく微妙な判断を要します。

軽くふれるタッチ
シューマン《鬼ごっこ》

軽快なスタッカートで演奏します(譜例3)。鍵盤からほとんど指を上げずに腕の重みや手の重みをかけずにレツジェーロで弾きます。2小節目の右手の拍頭はアクセントとスタッカートの両方ついた16分音符です。アクセントがついたスタッカートと、そうでな

いスタッカートを弾き分ける意識が求められます。

拍頭の「ラ」と「ソ」を弾くときは、真下に鍵盤を落とすのではなく、少し鍵盤を手前に引っかくような気持ちでアクセントをつけてください。アクセントのついていない三つの音は拍頭を弾いた力の残り(余力)で、軽いタッチで弾きます。この三つの音を、それぞれ一音一音弾き直してしまうと、音が重くなり軽快さに欠けますから、「さわる」とか「ふれる」イメージでスタッカートを表現してください。

ペダルは当然のことながらスタッカートを損なわない範囲で踏みましよう。sfの記されている箇所には、浅く短いペダルをすばやくチョコン!とやはり音と同時に踏み入れます。内声の二つの音を結んでいるアーティキュレーションを決して損なわないよう、よく聴いて入れてください。余裕があれば、



メロディの息づかい チャイコフスキー《古いフランスの歌》

スタッカートのついていている部分にもペダルをわずかに入れると拍子感が出ます。

●譜例5 シューベルト:《楽興の時》第3番

a 冒頭

Allegretto moderato
裏拍の和音が大きくなる

アーティキュレーションを明確に

しっかり落下
余力で弾く

b 第19小節~

この曲唯一の *f* レガートにならない



c 第9小節~

5 4 3 4
2 1 2 1

d 第24小節~

3 4 5 4
1 1 2 1

*譜例5:「ウィーン原典版 6つの楽興の時」(音楽之友社)より *aのペダル記号は筆者による
*cとdにはオーソドックスな指番号を記した

この美しいメロディこそレガート奏法で決まります(譜例4 a)。中間部には、なめらかなメロディに対してスタッカートの伴奏が現れます(譜例4 b)。この哀愁をおびたメロディと伴奏のコントラストが、曲の山場へと導きます。右手は、スラーのついた4音

のフレーズから2音の短い音型が連続し、一転してより長いフレーズとなって終結部へと至ります。この甘美な息づかいを見逃さず、細心の注意をはらいながらタッチの工夫をしてみましょう。このような初級向けの曲でも、ただ「切って弾く」だけでなく、スタッカ

重音のスラーの練習方法 (譜例5c, d)

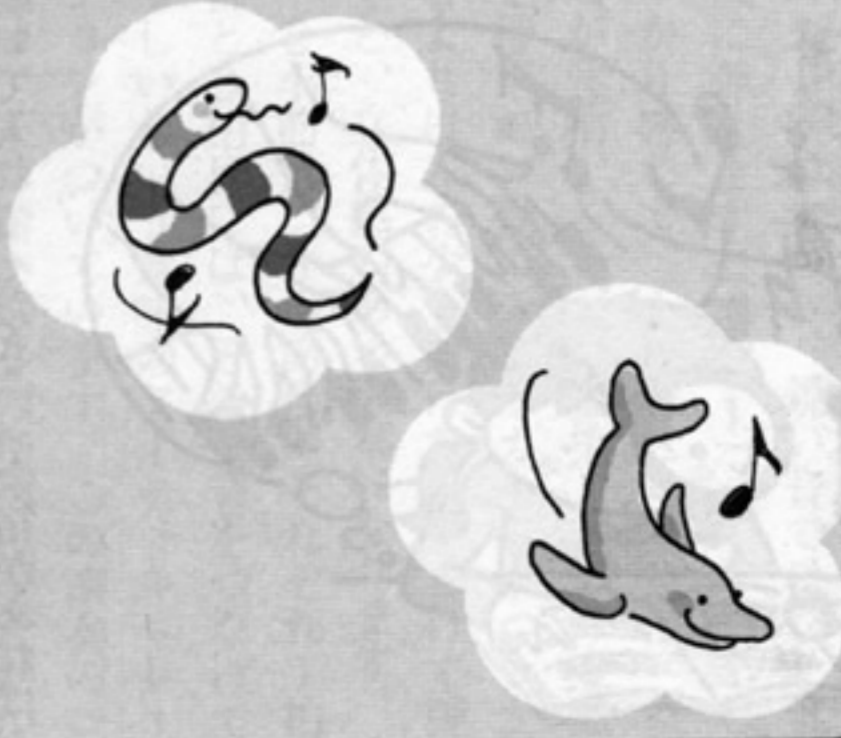
①まず上の声部を、演奏する時の指使いで「ゆっくり!なめらか!」に弾きます。メロディラインがしっかりレガートで弾けるようになったら、今度は下声のラインを小さな音で、やはり演奏する時の指使いでレガートに弾く練習をします。

②次は上下の音を一緒に弾きます。上声のメロディラインはレガートで、下声はスタッカートで弾きます。この練習方法を徹底的に行うと、重音のメロディを美しくレガートで奏でるのたいへん有効です。

③さあ仕上げです。上声はレガートで、しっかり鍵盤に指を密着させて弾きます。下声は軽く上声より少し弱音で丁寧にタッチします。「レガートで」と思いすぎないことです。上声と下声のタッチの圧力の差を意識してください。

上声を十分に鳴らし、下声の音は上声に添えるように若干弱めに弾きます。乱暴な言い方

をすれば、上声さえしっかりレガートで歌えていたら、十分にそのフレーズをレガートで表現できます。上下を完璧にレガートで弾こうとすると、かえって力んでしまい、上声部のレガートさえ不確実になってしまうこともあります。かといって音が抜けることのないよう気をつけて演奏しましょう。



音量と音質のバランス シューベルト《楽興の時》第3番

ートにもさまざまな種類があること、音の切り方で表情が変わることがわかるのではないのでしょうか。

●譜例6 ショパン:《バラード》第3番Op.47

a 冒頭

音を出す前に浅くペダルを踏んでおく

b 第13小節~

*譜例6:「ウィーン原典版 バラード集」(音楽之友社)より *aのペダル記号は筆者による

左手の軽快な2拍子の刻みに導かれ、少し物憂げなメロディが始まる名曲ですが、この左手の8分音符についているスタッカートの表現が重要です(譜例5a)。決して短すぎず、まろやかな音質のスタッカートが求められます。また拍頭は「ファ」の単音に対し、

裏拍は「ドファ」の重音なので、音量のバランスがどうしても重音に傾きまゝ。裏拍の重音が飛び出さないように、単音の拍頭に重みをかけて弾きまゝう。前述のタッチと同じように、「ファ」を弾く1回の動き(あくまでも叩くの

スタッカートとペダル

「スタッカートにペダルをつけてもいいのですか」とか「ペダルの深さや長さを、子どもにどう教えたらいいのですか」というご質問をよく受けますが、まずは今回説明したことをレッスンで実践してみてください。

あるいは「耳で聴いて音が濁っていないか確認しましょう」「ペダルを踏むことで音符の長さが楽譜と異ならないように気をつけましょう」とアドバイスするだけで、かえって生徒は真剣に集中し、楽譜の表記と自分のタッチを考えるとします。

レッスンではなかなか十分に時間はとれませんが、短い時間でもかまいません。こういう辛抱強い確認作業を繰り返し行って、タッチやペダルに対する意識を深めてください。



ではなく落下)の反動で、「ドファ」の重音をごく軽くタッチします。つまり1小節を2回の動き(落下)でまとめ、4分割の動きにしないようにします。このようにして、音量や音質を変えることなく、自然に拍子感を音楽のなかに表出するのです。したがってペダルも1拍目と2拍目に軽く、短く、浅く、鍵盤にタッチするのとはほぼ同時に入れます。

3小節目からの右手のメロディも、ほとんど同じ意識で拍子感をつかみます。1拍目裏拍の16分音符につけられた小さなスラーを大切に、くれぐれも1拍目と2拍目の間をつなげないように注意しましょう。

最後に、ショパン独特の繊細なアーティキュレーションを見てみましょう

休符の意識を大切に
ショパン《バラード》第3番

この曲には、重音のスラーが出てきます(譜例5c、5d)。重音では二つ以上の音が重なっているため、まず声部を分けて練習しましょう。単音でレガートができないのに、重音でできるはずもないからです。また重音のスラーでは、指使いがたいへん重要になります。この指使いの決め方については別の機会にゆずりませんが、楽譜に印刷された指使いが演奏者全員に当てはまるわけではありませぬ。指導者は演奏者それぞれの指使いを、手の大きさや技術にあわせて考慮しましょう。

(譜例6 a)。冒頭の右手の4小節間のアーティキュレーションに対し、左手は第3、4小節目に長いスラーがかかっています。13小節目にはペダル指示があります。左手2拍目は16分休符です(譜例6 b)。そして6拍目の8分休符はペダルが残ることなく、かといって機械的に無機質にプツンと切るのではなく、あくまでも音楽的な休符をとります。

重要なのは14小節目の右手8連符の最後の32分休符です。この短い休符をしつかり表現するのとはしないのではメロディの緊張感がまるで違います。このような休符こそショパン独特のアゴーギクのなかで意識する必要があると

思います。一案として32分休符の前の音にほんのちよつとつけたかつかないかわからない程度のペダルを入れると、やわらかい休符が表現できます。

ペダルを踏むことによってダンパーが上がり、音自体の響きが増すだけでなく、大なり小なりその残響によって、後続の音符や休符に大きな影響を与えます。また多くの曲に応用できますが、最初にペダルをあらかじめ踏んでおいてから最初の音を出す方法もあります。この曲の出だしもペダルを浅く踏んでおき、やわらかい音を指の腹を使って弾き始めてみましょう。音を出した後でペダルを深く踏んでしまうと、出した音が途中で膨らんだような響き

になり、歌い出しのレガートのメロディに段差がついてしまいます。



バロック作品を演奏する際はいうまでもなく、装飾音符とアーティキュレーションがたいへん重要な意味をもちます。また古典派からロマン派までいずれの時代の作品でも、作曲家が楽譜に書きこむさまざまな情報源には一つとして無意味な書き込みはありません。作曲家は、自分が練りあげた音楽を残すために、一音一音丹精込めて書いています。どんなに小さな休符でもどうしてもここに欲しい、と思つてそれを記します。そのエネルギーとこだ

わりは大変なものだと思ひます。

ここに記したスタッカートやレガート、タッチやペダルの説明はほんの一例です。このような演奏もある、というふうにご承知おきください。文頭にも申しあげたとおり、楽譜に書かれた記号を見落とさずにしつかりと把握し、作曲家がなぜそこにその記号を書き込んだのか、そしてそれをいかに演奏するかを常に考える癖をつけたいものです。また誌面の都合で今回は省きましたが、なめらかに演奏するための、そしてアーティキュレーションを表現するための「指使い」を探すことの大切さも忘れてはならないと思ひます。